SDGs の学習を通して、現代社会に問題意識を持つことができる授業づくりの検討

学籍番号　219314
氏　　名　鈴木　崇熙
主指導教員　松永　尚子

１．持続可能な社会への需要

第二次世界大戦以降、欧米諸国を中心に急速な経済発展を遂げた一方で、自然環境を消費し、貧富の格差を拡大させる等の国際的な課題をもたらした 1970 年代にはいると環境問題等持続可能な社会への注目が集まり、1972 年 Maedows らは、「このまま人口増加や環境汚染などの傾向が続けば、資源の枯渇や環境の悪化により、100 年以内に地球上の成長が限界に達する。」ことを指摘した。そして、1980 年になると、国際自然保護連合(IUCN)が作成した「世界自然資源保全戦略」の中で、「持続可能性」という概念が初めて示された。1992 年、ブラジル・リオデジャネイロで開催された国連環境開発会議、「地球サミット(リオサミット)」では、在の持続可能な開発に関する行動の基本原則である「共通だが差異ある責任」や「予防原則」、「汚染者負担の原則」などを収めた「リオ宣言」が採択された。2000 年、国連は 1990 年代に開催された主要な国際会議・サミットで採択された国際開発目標を統合したミレニアム開発目標（MDGs）では、具体的な８つのゴールと２１のターゲットが定められた。MDGs までは、途上国と先進国の格差や途上国における環境問題の改善が中心に掲げられてきたが、社会経済のグローバリズムが加速化する中で、都市の貧困や格差、人権などグローバリズムに取り残された人々の問題も表面化した。2015 年、持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals, SDGs）が国連で採択され、2030 年までに解決すべき 17 の目標と 169 のターゲットが設定された。すなわち、SDGs とは、世界全体で持続可能な社会を実現するために必要な取り組みである。

2. SDGs と ESD

SDGs は発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサル（普遍的）なものとして取り組むことが求められる。その対象は企業や現在社会活動を行っている大人だけでなく、幾世代にもわたって継続的に取り組むために子どもたちにもその概念を理解し、生涯にわたって積極的に取り組んでいくことが求められ、その中心的な存在として ESD があげられる。「持続可能な開発のための教育（EducationforSustainableDevelopmen;ESD）」は、気候変動、生物多様性の喪失、資源の枯渇、貧困の拡大等人類の開発活動に起因する様々な問題に対して、自らの問題として主体的に捉え、人類が将来の世代にわたり恵み豊かな生活を確保できるよう、身近なところから取り組む（thinkglobally,actlocally）ことで、問題の解

決につながる新たな価値観や行動等の変容をもたらし、持続可能な社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動である。ESD は第 74 回の国連総会において、「ESD が質の高い教育に関する SDG に必要不可欠な要素であり、その他のすべての SDGs の成功への鍵として、ESD は SDGs の達成に不可欠な実施手段である」であることが指摘されている。我が国でも、平成 29 年度の学習指導要領の改訂において、SDGs に関連した概念が多く取り上げられている。

3. SDGs を取り入れた社会科授業に関する先行研究

SDGs を取り入れた教育において社会科の果たす役割は大きい。高橋は、社会科において SDGs に注目する理由として「国内外における諸課題の原因や影響を理解させるだけにとどまらず、その解決に向けた取組を将来担うであろう市民としての資質・能力を育むことが重要なのである。そのことは，ＳＤＧｓを達成するために，生徒がより良い社会を形成する主体へと自覚させる大きな一歩となる」と示している。村山・福田は、中学 1、2 年生を対象として、SDGs の授業を地理的分野の授業でどのように取り上げるのか日本の中学生の出身地域を対象として実践研究を行っている。授業の様子から、身近な地域であるがゆえに、生徒は生活体験や既習事項を活用しながら、学習に取り組む姿がみられたとしている。また、生徒に対して行ったアンケート調査の結果から、話し合い活動が好きな生徒が多い一方で、多面的・多角的に思考したり、自分の考えを他者に説明したりすることを苦手にしている生徒の割合が高いとし、授業構成を再考すべきであることを指摘している。

４．中学２年生の社会科の授業に SDGs を取り入れた事例研究

SDGs に関する教育の実践の１つとして、中学第２学年の社会科を対象とした４時の授業を行った。授業では、動画やスライドショーを用いて基礎的な知識を提供するとともに、自由討論やすごろくの作成・実施等、楽しくかつ能動的に学ぶように計画した。授業後のアンケート調査では、授業前に行ったアンケート調査に比べて、特に、「① あなたは、ＳＤＧｓについて人に説明することができますか？」について、説明できると答えた割合が授業前の 39%から授業後には 70%にまで上昇するなど、SDGs の興味関心を抱いた生徒の割合は高くなった。自由記述式の Q2 では、授業前の回答は、「ごみの分別」「二酸化炭素を減らす」「リサイクルする」等の環境問題が中心で、ごみの分別等の家庭でも取り組んでいる回答が中心であった。授業後は、「植林を行う」「浜辺でのごみ捨てを法規制する」等、より深い内容の取り組みが挙げられた。４時の授業を通じて多くの生徒たちが SDGs に対して理解を深めた一方で、SDGs をとても意識するようになった生徒の割合は限定的で更なる授業の改良が必要である。本授業を通じては、すごろくをより思考性の高いゲームに変更すること、SDGs の 17 の目標のうち生徒の興味関心の高い目標を自由討論やゲームに用いることなどが改良点としてあげられる。